

III 乳腺画像診断のための Web 教育の可能性

2. 精中機構 乳房超音波講習会
における e-learning 導入

田中久美子 日本乳がん検診精度管理中央機構教育・研修委員会超音波部門長/足立乳腺クリニック

乳がんの検診および精査には、マンモグラフィに加え、超音波検査が欠かせない。

本邦の超音波診断装置、検査方法、診断学は、国際的に見ても普及しており、そのレベルも高いと考えられる。これを支えているのは、受検者のニーズに応えるメーカーの技術、検査にかかわる医療者の努力であるが、超音波講習会という形での教育が継続的に行われていることも重要であろう。本稿では、超音波講習会の歴史を振り返りつつ、コロナ禍の影響もあり最近行われた e-learning (EL) の導入について紹介したい。

コロナ禍以前の講習会

乳房超音波講習会は、2003年より、日本乳腺甲状腺超音波医学会 (JABTS、当時の名称は日本乳腺甲状腺超音波診断会議) 教育委員会の主催で開始された。その後、乳がん検診における超音波検査の重要性を鑑み、単一の学会の運営ではなく、乳がん検診にかかわる複数の学会からの委員で構成される日本乳がん検診精度管理中央機構 (精中機構) の運営に2013年から移行し、講習会が引き継がれた。2023年現在、講習会開始から20年であり、コロナ禍による中断はあったものの、精中機構の運営となつてから10年というところである。

この講習会の目的は、乳がん超音波検診の精度管理であり、対象者は一次検診および精密検査に従事する医療者 (検査技師、放射線技師、看護師、医師) である。

コロナ禍以前の講習会は基本的に土・日2日間のプログラムで、国内で複数の会場が設定され (東京、名古屋、大阪が多いが、時にそれ以外の地域でも開催)、半日は総論的な講義を全員に行い、土曜午後と日曜午前にグループ講習を

行った後、画像試験を行い、A、B評価をもって認定とした。C、D評価は再受験が必要となる。現在までの超音波講習会の受講者数と評価を表1に示す。AとBの合計が、技術は78%、医師は70%であり、認定を受ける者は技術・医師とも7割は超えている。講習会は技術 (検査技師、放射線技師、看護師) と医師でプログラムが若干異なり、1回に60名前後を定員として行われた。講師は初期に講習会を創設したJABTSのメンバー (実行委員長・東野英利子先生) を中心に、講習会を受講してA判定で講師を受諾した者が務め、講習会は講師の養成の場でもあった。JABTSが編集・改訂する『乳房超音波診断ガイドライン』を教材として、実行委員・試験委員により適宜講習教材や試験問題の改訂を行いつつ、講習会が継続された。J-START (40歳代を対象に超音波検査による乳がん検診の有効性を検証する比較試験) が行われた際には、参加する超音波検査従事者 (実施者および判定者) は、JABTSまたは精中機構が主催または共催した乳房超音波講習会を修了していることが試験参加の必須条件であった¹⁾。

本邦における乳房超音波に関する教

表1 JABTS および精中機構主催あるいは共催乳房超音波講習会受講者と評価
(2023年3月31日現在)

評価	A	B	C	D	評価不明	合計
技術部門	2065	1579	927	24	90	4685
医師部門	1125	1449	965	96	52	3687